

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子供の頃、私は作文が苦手だった。

学校で原稿用紙を配られ、さあこれから「夏休みの思い出」について作文を書きなさいなどと言われると憂鬱になった。原稿用紙を前にした私は、まるで白い広野に向かつて立ちすくんでいるときのような恐怖感を覚え、鉛筆を持つ手が動かなかった。

そんな私がいまは職業的なライターとして日常的に文章を書きつづけている。それには、文章の書き方において、ひとつの方法を身につけることができたことが大きかったように思える。

私は、これまで、ノンフィクションと言われるものを多く書いてきた。しかし、私は、新聞社や出版社に勤めたこともなく、編集プロダクションのようなものにも属したことがない。だから、誰かに文章の書き方を教わったりしたことがない。すべてひとりで書き方を工夫してきたのだ。そして、どうにか身につけることのできたその書き方とは、ひとことと言ってしまう「できるだけ眼に見えるようにする」ということだった。頭の中にあるものを視覚化する。いや、実際には、頭の中にあると思っただけで、視覚化するまでは本当の意味では頭の中にも存在していない場合が多い。眼に見えるものにしたとき、初めて存在していたということが確認できるだけなのだ。

なぜ書けないのか。それは最初からきちんとした文章を書かなくてはならないという脅迫感があるからだ。それをまず取り除いてしまう。そのために私が見出した具体的な方法は「単語から文章へ」というものだった。

頭の中のものもやしているものを、まず暗号のように簡単な単語で記してみる。それはとても簡単なことだった。次に、その単語を並べて短い文章にしてみる。これもそう難しいことではない。たとえば、《子供の頃 作文 苦手》とあったら、《子供の頃、作文が苦手だった》とすただけなのだ。それを繰り返すうちに、いくつかのセンテンスが生まれる。

そのようにして生まれた文章に、何度か眼を通して見ると、そのセンテンスに何か付け加えたいことが出てきたり、センテンスとセンテンスの間に入ってくるべき文章が浮かんできたりする。

しかし、重要なのは「書くこと」と「読むこと」が浮かんでこないという場合である。

私はライターになったばかりの頃、主に仕事をしていたある雑誌の編集部に行っては、その日に取材したことを逐一話したものだ。その編集部の人たちは聞き上手で、「それで？」とか、「それが？」とか合点の手を入れながら聞いてくれる。そこで熱中して話しているうちに、自分にとって面白いことと他人にとって面白いことが少しずつわかってくるということが続いた。

もし作文で何を書いたらいいかわからない子供がいたら、とにかく話を聞いてあげることだ。どんなに話し下手な子でも、話しているうちにはいくつかの単語が口をついて出てくるだろう。話のあとで、その単語を書き取らせるのだ。基本的にはそれだけで作文は書けると思う。

いまの私なら、「夏休みの思い出」という題の作文をうまく書けないでいる小学生の私にこんなふうに話を聞いてあげるかもしれない。

「夏休みは何をしていたの？」 「毎日セミを捕った。」

「セミって、どうやって捕るの？」 「網で。」

「むずかしい？」 「アブラゼミは簡単だけど、ミンミンゼミはむずかしい。」

「どうして。」 「ミンミンゼミは高いところにとまっているから。」

「柄の長い網なら捕れるの？」 「長い網でもミンミンゼミはうまく捕れない。」

「どうして。」 「用心ぶかくて、網を近づけるとすぐ逃げちゃうから。」

「アブラゼミは？」 「ちよつとバカだからあまり逃げない。」

「おもしろいね。」 「アブラゼミはたくさん捕れる。」

「この夏休みに何匹捕った？」 「一〇〇ぴき以上。」

「ミンミンゼミは？」 「三ぴき。」

そこで、私は小学生の私に単語を書き取らせる。すると、小学生だった私はこう書くかもしれない。

《夏休み セミとり ミンミンゼミ アブラゼミ 用心ぶかい ちよつとバカ 一〇〇ぴき 三ぴき》

ここまでくれば、もう作文の半分くらいは書けたも同然だ。

もし、こうした経験を何回か繰り返せば、質問者がいなくても同じことができるようになるかもしれない。自問自答ができるようになるのだ。しかし、とにかく大事なものは、ぼんやりとしていることを単語という形で眼に見えるものにするということである。その単語を簡単なセンテンスという形でさらに明瞭に視覚化する。視覚化されたセンテンスは、さらに新たな言葉、新たなセンテンスを呼び寄せてくれることになるだろう。

*注 センテンス——文のこと。

(沢木耕太郎『銀河を渡る 全エッセイ』による)

問一——線部1「鉛筆を持つ手が動かなかった」とありますが、これはなぜですか。理由を説明した部分を問題文中から三十五字以内でぬき出し、始めと終わりの五字で答えなさい。

問二——線部2「ひとつの方法」とありますが、これはどんな方法ですか。解答らんに合わせて、問題文中から十五字でぬき出して答えなさい。

問三——線部a「プロダクション」とありますが、次の1～5の外來語を漢字の熟語で表現するとどうなりますか。後のア～オから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---------|----------|--------|----------|---------|
| 1 プログラム | 2 プロジェクト | 3 プロセス | 4 プロファイル | 5 プロポーズ |
| ア 過程 | イ 企画 | ウ 求婚 | エ 人物紹介 | オ 番組表 |

問四 〰〰線部 b 「口をついて出てくる」とありますが、次の 1 ～ 4 は「口」を用いた慣用句です。これについて、次の I ・ II の問いに答えなさい。

- 1 ☐ を合わせる 2 ☐ に乗せられる 3 ☐ を切る 4 ☐ に ☐ を立てる

I 1 ～ 4 の ☐ にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

II 1 ～ 4 の意味として最も適当なものを、それぞれ次の ア ～ エ から選び、記号で答えなさい。

- ア うまい話でだまされる イ 最初に発言する ウ 世間の悪口やうわさを防ぐ エ ほかの人と話の筋道を合わせる

問五 〰〰線部 c 「自問自答」とありますが、次の 1 ～ 4 の意味をもつ、「自 ☐ 自 ☐ 」という形の四字熟語を答えなさい。

- 1 必要な物資をみずからの生産だけでまかなうこと
2 自分のしたことを自分でほめること
3 人をだますために計画から実行まで自分ですること
4 思いのままにすること

問六 問題文中の会話文の内容を参考に、〰〰線部の言葉をこのままの形で使って、五十字以上百字以内で作文をしなさい。ただし、「夏休み」は最初に、「三びき」は最後に用いるようにすること。他の言葉の順序は入れかえても構いません。また、同じ言葉を何度用いても構いません。

二 次の 1 ～ 3 の各組の俳句を、春から季節の順に並べ、記号で答えなさい。

- 1 ア 風 ^{かぜ} を花 ^{はな} びらは ^は する田 ^た 打 ^{うち} かな
イ 大根 ^{だいこん} をどこかに ^{どこ} 干 ^ほ せりどの家 ^{いえ} も
ウ 天窓 ^{てんそう} も隠 ^{かく} さむばかり今年 ^{ことし} 薬 ^{ぐすり}
エ 日の照 ^て れば帽子 ^{ぼうし} いた ^い だき草 ^{くさ} むしり
- 2 ア 遠方 ^{とんぱう} の雲 ^{うみ} に暑 ^{あつ} を置 ^お き青 ^{あお} さんま
イ 浮 ^う 船 ^{ふね} をつかみ分 ^{ぶん} けばや水 ^{みづ} の色 ^{いろ}
ウ 初 ^{はつ} 鰯 ^{いわし} やほのかに白 ^{しろ} き大 ^{おお} 江 ^え 山 ^{やま}
エ 組 ^{ぐみ} 板 ^{いた} に鱗 ^{うろこ} ちりしく桜 ^{さくら} 鯛 ^{たい}
- 3 ア 立 ^{たち} 去 ^さ ればまだ日は高 ^{たか} し藤 ^{ふじ} の花 ^{はな}
イ 水 ^{みづ} 漬 ^{づけ} やどこも真 ^ま 赤 ^{あか} な実 ^み 南 ^{なん} 天 ^{てん}
ウ 夕 ^{ゆふ} 空 ^{そら} や切 ^き 先 ^{さき} のぞく軒 ^{のき} 菖 ^{しょう} 蒲 ^ぶ
エ 欄 ^{らん} 干 ^{かん} にのぼるや菊 ^{きく} の影 ^{かげ} 法師 ^{ほうし}
- 山上樹実雄 右城暮石 寺島ただし 小沢青柚子
飯田龍太 椎本才麿 正岡子規 大島蓼太
波多野爽波 草間時彦 森川許六

三 次の 1 ・ 2 の 〰〰線部の言葉と同じ使い方のものを、それぞれ後の ア ～ オ からすべて選び、記号で答えなさい。

- 1 試合に勝つために熱心に練習している。
ア 雨が降ることをいのるために祭りにおこなう。
イ 宿題を忘れたために注意された。
ウ 準備をおくれているために延期となった。
エ つかれをいやすために温泉へ行った。
オ 雪が積もっているために通行止めとなった。
- 2 市場が閉まると目に入るのはシャッターばかりになった。
ア かれはいつも不満ばかり言っている。
イ ゲームばかりしてはいけない。
ウ 先ほど目的地に着いたばかりだ。
エ なみだを流さんばかりに喜んだ。
オ 六月に入って雨ばかり降っている。

四 次の 1 ～ 5 の各組の ☐ に同じ漢字一字を入ると、三つの言葉がで上がります。 ☐ に入れるのに適当な漢字をそれぞれ答えなさい。

- 1 時 ☐ 交 ☐ 千 ☐ 紙
2 大 ☐ 乳 ☐ 知識
3 年 ☐ 屋 ☐ すべり
4 夕 ☐ 平 ☐ 用品
5 今 ☐ 王 ☐ 飯前

五 次の 1 ～ 4 の文の ☐ に入る言葉をそれぞれ答えなさい。ただし、すべて「あ」で始まるひらがな三字で、「あ」以外の二字もア段(あ、か、さ、た...)です。

- 1 かれは見るからに不満を ☐ にした顔つきをしていた。
2 不注意から、 ☐ 大事故になってしまったところだった。
3 父は有能で、いろんな企業から引く手 ☐ だったそうだ。
4 中学に入学し、思いを ☐ にして学習にいとむ。

六 次の漢字しりとりを、〔条件〕に合わせて完成させなさい。

- 〔条件 1〕 漢字の読みはすべて音読みで、かなで二字です。
〔条件 2〕 一つの字の読み方は二回ともまったく同じです。
〔条件 3〕 各組の 1 ～ 3 の漢字の読みの一字目は、すべて同じ行(たとえば力行ならカキケコ)の別の読み方です。
〔条件 4〕 各組の 1 ～ 3 の漢字の読みの二字目は、すべて同じで、「く」「つ」「ん」のいずれかです。

(例) 相 1 知 2 解 3 止
〔答え〕 1 関 (かん) 2 見 (けん) 3 禁 (きん)

- A 快 1 動 2 議 3 意 意気 3 肉
B 保 1 心 2 痛 2 食 3 食 3 分
C 目 1 画 2 画 集 2 着 3 着 3 地

受験番号

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

問六								問五				問四		問三	問二	問一
								4	3	2	1	II	I	1	書くところのもの、 方法	}
								自	自	自	自	1	1			
												2	2			
								自	自	自	自					
												3	3			
												4	4			
														5		

六

C	B	A
1	1	1
2	2	2
3	3	3

五

4	3	2	1
あ	あ	あ	あ

四

1
2
3
4
5

三

1
2

二

3	2	1
↓	↓	↓
↓	↓	↓
↓	↓	↓